

説教 『ありとあらゆる障壁を超える』 山本 護 牧師
聖書 ヨシュア記 24:14~15 / マタイによる福音書 8:14~17

「イエスが山を下りられると、大勢の群衆が従った(マタイ8:1)」。イエスは聖なる山を下り、俗なる平地を自分の領域とする。あたかも、天の御子が世に降ったがごとくに。私たちは、つくられた聖性ではなく、俗なる現実においてこそキリストと出会う。山を下りたイエスは、大群衆に取り囲まれながら何よりもまず、らい病人に触れて癒し(8:3)、異邦人を癒した(8:13)。両者共に、律法では排斥すべき者だが、イエスはそんな彼らを優先して癒し、その次は病に伏すペトロの義母を訪ねる(8:14)。

義母は癒され、「夕方になると、人々は悪霊に取りつかれた者を大勢連れて来た(8:16)」。日没で安息日が終わったがゆえにやって来た。ということは、ペトロの義母への癒やしは安息日に為された。律法で接触禁止のらい病人や異邦人に接し、規定に抵触しても蔑まれた女に触れて癒した(8:15)。

いかなる障壁をもってもイエスの歩みを妨げることはできない。穢れは人々の感受性深く根づいていたが、イエスはそこを超えていく。嫌悪されるローマ兵への癒しは評判の凋落となるが関係ない。律法の典型、安息日さえも「人が癒される」事の下位にある。イエスは、苦しむ者、虐げられた者を癒さずにはいられない。俗なる平地とはそのような場なのだ。教会もまた、聖なる山に安住することなく、イエスに従って俗地へ赴く。山でも平地でも、イエスが働かれる場こそが真の聖所である。

それでは何によって癒しが実現するのか。福音書は、預言書を引いて説明している。「それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。[彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った](8:17)」。溢れる生命力を分け与えて癒したのではない。御自分で病の肩代わりをなさった。つまりこの時点で、すでに十字架を負っておられる、とも言える。十字架は、律法に拘泥する者にとって、秩序安寧を守る異邦の処刑道具。そんな恐ろしいもので神の子の身が削られ、癒しが実現する。神の子イエスは、御自分を削ってでも、疎外された者を癒さないではいられないのだ。

ペトロは既婚者だった(8:14)。網という財産ばかりか、養うべき家族まで放り出して出家してしまう(4:18~20)ことは世間的に非難されよう。イエスはそんな世間側にいないばかりか、宗教共同体の側にもいない。ペトロは、家に戻ることはバツが悪いが、イエスは弟子の逡巡など斟酌せず赴く。恵みは、世間体を超えてペトロの家族を癒す。姑は「起こされ、彼(イエス)に仕え出した(8:15 岩波訳)」。仕えるのは青年男子ばかりではない。老いた義母もまたイエスに仕え、何事かの使命を為す。ペトロの家族は破綻しかけていたが、キリストに結ばれることで家族のつながりは深められた。信仰は己の決断によるものだが、個々人のものでありつつも、一方でまた、閉ざされた家族にも波及する。

モーセの後継者ヨシュアは民に告げた。「もし主に仕えたくないというならば～仕えたいと思うものを今日、自分で選びなさい。ただし、わたしとわたしの家は主に仕える(ヨシュア 24:15)」。ヨシュアは自由と自らの領域を絶妙に言い表している。娘婿ペトロのことで義母はイエスを憎んでいたが、病を負われ、仕える者となった。恵みと救いはどのようにか波及する。家族という微妙な障壁も超えて働く。



【おまけのひとこと】

敵対する者同士の間厚い壁 身近な者同士にある奇妙な被膜 どちらの衝立も共に壊しがたい
キリストはすべてを透過して誰の友にもなる だがこちら側は こちらに与する者を欲している